

葉が繰返し出て来る。その例を二三挙げる。

圖については一と申しませぬが、要塞を見るには（參謀本部編「日露戰史」）第六卷の第十と第十一圖、是も諸君は既に御研究になつてをりませうが、もしも私共開戰當時に此様な主要砲臺の圖を持つて居つたならば、どれ程迅速に旅順を攻略し得たかといふ感じを持つのであります。

勿論、そんな明細な圖面は第三軍には勿論、大本營にも無かつた。第三軍參謀達は現地へ行つて偵察しながら、或は戦ひを仕掛けながら、圖面を造り、且つ訂正して行つたのである。敵の備砲についても、「敵の備砲を偵察したのを見ると、實際の数の半分位になつてゐるのであります。野砲五十門、重砲七十五門、別に臼砲二十門としてありますが、實際用ゐた砲は、戰史で御覽の通り、重砲が百三十門か百四十門で、野砲は割合に少く、野砲外の三十七耗とか四十七耗の輕砲と機關銃とがあつて、それが我が突撃隊に對して多大の妨害を與へたのであります」と述べてゐる。

龍眼地方の堡壘についても、その状態が當時の軍司令部、或は衝に當つた第九師團に、現在の參謀本部編「日露戰史」第六卷第七圖の様に明細に解つてゐたら、第一回總攻

だ。それに受入れを促された時は總攻撃の時日が迫つてゐて、砲床のセメントの乾きに要する日数を勘定すると、どうしても間に合はぬので、はかばかしい返事をしなかつただけの事だ。なるほど實際に施行して見ると、僅か九日で工事が完了した。これも失敗の一つであらうが、實際の戦争となれば、その種の蹉跌は幾らもあらう。

それよりも問題なのは、二十八糎砲に對する陸大教官の認識である。命中率が悪いと言はれたこの砲は現地において的確な命中率を示し、第三軍の二度に亙る追加要求で、最初六門しか送らなかつたものが、最後の第三回總攻撃の時には十八門になつてゐる。二十八糎砲が、最初なぜこの様に輕んぜられたのか。それは開戰までの日本には全くと言つてよいほど、攻城法研究が行はれてゐなかつたからである。その間の事情について、陸上自衛隊幹部學校の戰史教官が書いた「旅順要塞攻略戰」には次の様に書かれてゐる。

このころ、要塞攻略に關する研究は參謀本部第一部の擔任であつた。しかし第一部の研究は、普佛戰爭での機動戰に専念し、ドイツ人雇傭教官メッケル少佐が、陸軍大學の學生に傳えたものもまた、野戰での巧妙な指導運用であつた。こんな風潮であつたから、ドイツ公使館附武官當時に、要塞攻撃を研究した參謀次長田

擊第一日に取れてゐたらうと言つてをり、また永久堡壘と臨時築城との差別についても、自分達の技術的能力が足りなかつたため、深く考へてゐなかつたのが失敗の原因だと言つてゐる。要するに、「もし當時、今の様に解つてゐたら」の連續なのである。

今更言ふまでもないが、旅順要塞は日清戰爭後、約八年間にロシア側が一萬五千人、セメント二十萬樽を費して造つたものである。その程度は日本にも解つてゐた。が、その程度でどの位堅固で完壁な永久、半永久堡壘、砲臺が出来るものか、その點については第三軍のみならず、滿洲軍總司令部も大本營自身も全く見當が附いてゐなかつたのだ。後で解つた事だが、一萬五千人と言へば、この戰爭で日本が消費した戦費の七分の一に當る。さういふ金城鐵壁に對して、第三軍は十五糎、九糎の青銅臼砲のみを以て攻撃を開始したのである。司馬氏が「大砲のなかの巨人」と呼んでゐる二十八糎砲が第三軍の手に入り、その凄じい效力を發揮したのは第二回總攻撃開始後の九月三十日であつた。

それについても第三軍は受入れを拒否したかの様に、その愚を責められるが、必ずしもさうは言ひ切れない。第三軍の參謀達は開戰前に觀音崎に据ゑ附けられてゐた二十八糎砲を見學してゐたのであるが、その破壊力の偉大なる事は知らされてゐながら、命中率が悪いと教へられてゐたの

村怡與造少將の意志を繼ぐものがなかつた。従つてドイツ教令を翻譯した「攻城教令案」も開戰に間に合はず、ましてや、攻城用兵器資材の準備、特に攻城砲の研究、曲射砲の整備、突撃器材の研究開發、砲彈の製造など、要塞攻略の諸準備は全くしてゐなかつたのである。

司馬、福岡兩氏はメッケルが兒玉將軍の才能を頻りに稱揚してゐた事を強調し、それに較べて乃木將軍の無能を強調してゐるが、右の引用に明らかな様にメッケルは野戰の大家なのである。そのメッケルにかはいがられた兒玉將軍と雖も攻城法においては、果してどれほどの成果を挙げ得たかは解らない。二〇三高地は兒玉將軍が落したのではないかといふ反問に對しては後に答へる。とにかく、日本軍中、要塞攻撃の専門家が一人もゐなかつたといふのは事實だつたと思はれる。第三軍司令官を振り當てられた乃木將軍を悲運の人と呼んでも、あながち間違つてゐない。もし將軍がそれほど愚將であるなら、さういふ人間を第三軍司令官に任じた大本營、それを認めた滿洲軍總司令部の大山巖總司令官、兒玉總參謀長に責めは歸せられなければならないまい。

しかし、最大の失敗は、日露開戰時における旅順輕視といふ事であつた。